

「タジキスタン野菜栽培技術研修指導」を終えて

国際協力事業団 筑波国際センター（以下、TBIC）では途上国からの研修員に対し稲作栽培、農業機械設計、灌漑排水、野菜栽培に関する直営研修コースを実施している。今回、当社はこの直営コースの一つ“タジキスタン共和国 国別特設「野菜栽培」コース”を受託し、8月半ばから11月末の期間に研修指導業務を実施した。ここでは、講義、実験実習、実践現場の見学を通じて日本の野菜栽培及び普及の現状を紹介し理論と普及の知識を提供することによって、タジキスタン国の農業振興に寄与する人材を育成することがコースの目的である。また、その到達目標としては、日本の野菜生産の現状を理解し、栽培技術及び植物生理を習得すると共に、技術普及システムと手法を習得することである。

当社は研修指導員の配置と関係事務を受託し、カリキュラムの計画・実施、それに係る講師や見学先との連絡調整、実験・実習の計画・準備及び指導を行った。コースには JICA 担当職員及び研修指導者、JICE 研修監理員が配置され、TBIC に於いて実施された。研修の全てに係わる研修指導員としては、私と農林水産省 OB で農学博士である 大久保隆弘 氏のご協力を得て 2 名で指導にあたる体制を組んだ。

技術指導にあたっては「理論と実践、現場に学ぶ」を基本方針に研修を進めた。研修計画の立案に際し、研修員自らが栽培の一連の流れである播種、圃場準備、元肥施与、苗の移植、栽培管理、及び収量調査という栽培技術を習得できるよう設定した。ただ、受け入れ期間の制約上、各工程を平行して進めなければならず、理論と実際をいかにして理解し習得してもらうかが工夫のしどころとなった。そして研修員が作業を傍観するのではなく、実際に栽培を行い、体で技術の習得をするように進めた。また、研修が一方通行の情報伝達にならないように、帰国後もお互いに技術検討ができる関係を構築することにも努めた。

研修員は野菜栽培研修に先立ち、来日後約 2 週間は、滞在中の日本での必要知識や社会制度等の一般オリエンテーションと研修の目的・日程・内容等のコースオリエンテーション、及び日常生活に必要な日本語集中講義を受けた。また、TBIC では夜間に日本語講座やコンピューターに関する講座を実施しており、希望者は自由に履修できる体制となっている。その他、夜間や週末に日本文化紹介パーティなどの厚生行事が催され、各国からの研修員と知り合う機会などが提供されている。

当初、研修員からは常に自国の技術と比較した質問が多かったが、研修が進むに従って野菜栽培技術の根幹に係る質問を指導員のみならず見学先の農家に対しても積極的に行い、与えられた機会を大切にしようとしていた。チームワークも非常に良く、実習や調査、そしてレポート発表に熱心に取り組み、研修コースの意義を十分に理解したと思われる。3ヶ月半の研修を終え帰国バスを待っている間に、研究員達と別れがたい感情が湧き出し、研修事業に携わる「喜び」と「悲しみ」を感じるとともに、今後も研修員たちと交流を続けていきたいと改めて感じている。

（筑波にて、長谷川）



バレイショ追肥試験



練床育苗実習

第1回 : 今、なぜ草の根か？～草の根型協力の意義

途上国援助において、地域住民を開発プロジェクトの主役と考え、プロジェクトの成果が地域住民に直接裨益するために、「住民参加型開発」とか「住民の真のニーズに基づいたプロジェクト」の必要性や重要性が指摘されている。この新シリーズでは、そうした観点から有効な手法の一つであると思われる「草の根型協力」について考え、国際耕種がこの分野にどのように関わっているかを紹介していきたい。

まず「草の根」という言葉から真っ先に連想されるのが「NGO」だが、「NGO だから草の根」あるいは「草の根だからNGO」という短絡的な認識ではなく、そういう活動形態が必要だから、あるいはそういう「機能」が必要とされているから、「草の根」とか「NGO」という手法を取る、というような「機能論的に」考えたいと思う。つまり、「NGO」にしても「草の根」にしても一つの「手段」でしかなく、目的がはっきりすれば手段や形態にはこだわらなくても、必要なことは自ずと明らかになってくる。またこのシリーズが、開発援助において「草の根型」アプローチを取る場合の事例作りやしくみ作りを考えるきっかけになれば、とも考えている。

言うまでもなく、「参加型開発」において「住民」がプロジェクトに「参加」すれば、それだけで目的が達成されるわけではない。「参加型開発」の本当の意味は、ただ単に住民が参加するということではなく、なるべく「外部」に依存せず、住民が自分たちの頭で、資源で、人材で問題解決できるようにすること、である。したがって「住民を巻き込む」のではなく、より積極的に住民が主体となって行動し、外部の人間がそれに「巻き込まれていくこと」がプロジェクトの成功や持続性のために必要となる。

ところが現実はどうか？ 金さえあれば、機材さえあれば今抱えている問題は解決できる、という(相手側の)姿勢は、多かれ少なかれこの途上国でも見られる。逆に言えば、いくら「草の根型」、「住民参加型」で住民側(途上国側)の意見を吸い上げようとしても、ドナーに援助されないと実施不可能な意見、要望、解決策(資金が欲しい、機材が欲しい…)しか出てこない。現在の自分達の実力の範囲内で実施できるようなロー・コストのアイデアや実現可能なアイデアは途上国側からなかなか提案されない。

「草の根」とか「参加型開発」のめざすものが、(最終的には)外部からの支援に頼らない「自立的発展」だとすれば、こうした(外からの援助頼みの)「思考過程」そのものに変革をもたらすことが必要になる。結局、住民側(途上国側)に主体性があるのか？ という点が重要で、自分たちの頭で考えることの重要性、自分たちのアイデアが実現されていくことのおもしろさに彼ら自身が気づくこと、が必要である。ところがこれは「トップダウン・システム」ではなかなか実現が困難で、その時に外国人が、「外部者」であることのメリットを生かして「現場の人たち」に働きかけて「ボトムアップ」ができれば、つまり「草の根型」のアプローチが取れば、有効な手段となりうる。したがってこれは、「トップダウン方式への挑戦」でもある。

このシリーズでは、国際耕種が過去そして現在までに「草の根型の協力」として、さまざまな途上国で活動しているいくつかの事例について紹介し、その意義や課題、将来の方向性について考えていきたい。

新シリーズ：開発調査再入門 ～ 変革期への対応、そして効率的運用とは

第1回：転換期にある開発調査

「開発調査」とは、開発途上国の社会・経済の発展に役立つ公共的な各種事業の開発計画の策定を支援する業務、とされている。これまで多くの途上国で実施されてきた日本の開発調査は、それぞれの国の開発に大きく貢献してきた。そして、その多くは基盤整備事業であり、言い換えれば「箱もの」援助を中心に実施されてきた。しかし、このような「箱もの」援助の一部では、人材や運営資金の不足等の理由から適切な運用・管理が十分に行われず、その効果を十分発揮できていないものもある。一方、日本国内では長年の不況による税収の減少や国家予算の効果的利用からの ODA の見直し論も出てきている。また、それを背景とする海外協力への国民の関心の高まりから、援助予算の効率的運用への配慮が一層要求されている。

その一つの現れとして見られるのは、援助全体の流れが従来型の灌漑施設、ダム、道路、港湾などを作るハード重視型からその運営や運営のための「しくみ作り」あるいは人材育成等を中心とした、いわゆるソフト分野重視型のプロジェクトへのシフトである。ソフト重視型プロジェクトは、実施される事業を効率的かつ持続的に運営するには地域の状況に合った適正規模での開発と、それを動かす「システム作り」や「人づくり」なしでは目的の実現が不可能であるという発想で計画が立案され、実施される。

そのような流れの中で、これまで実施されてきた従来型の「開発調査」もひとつの大きな「転換期」にあり、これまでとは違った対応の仕方が求められてきている。そして現実には、最近の開発調査では、その本来の目的である計画作りを主体としながらも、その実施形態にさまざまな模索が行われようとしている。たとえば、PRA などの住民参加型の調査手法により住民の「本当の要望」を発掘して計画に反映させようとしたり、提案された将来計画をより確実に実現するために実証調査を組み入れたり等の動きが見られる。その際の重要なキーワードとしては、「住民参加」、「持続的開発」、「NGO との連携」等があげられる。そして、このような調査を実施していく中で地域住民（住民組織や NGO など）との連携や接触の場を拡大しながら、真に地域住民に役立つ実現可能な事業計画の策定及び実施へ導こうとしている。さらに、単に経済効率ばかりを主眼にするのではなく、地域の資源循環や環境保全にも配慮した計画作りも行われている。

このように転換期を迎えている今日の途上国援助の中で、より良い案件を形成していくために、今後も開発調査は大きな役割を担い続けることには変わりない。開発調査をより効果的に実施していくことにより、それに続く事業が途上国の発展や貧困削減、住民の生活改善等の面で貢献していくはずである。国際耕種はこれまで JICA の実施する開発調査（主にマスタープラン調査と F/S 調査）に参画しながら、それぞれの国々で現地の状況を見る機会を得ている。このシリーズでは、これまで我々が途上国への協力の中で関わってきた開発調査などの業務を事例として取り上げ、それらの業務を通して我々が感じてきた開発調査の役割や課題等について紹介していこうとするものである。また、今後の開発調査はどうあるべきか、さらに現在の海外援助という枠組みの中で開発調査はどのような使命を担うべきか、また変革して行く可能性があるのか等についても考えていきたい。



灌漑水路建設（ブラジル）



住民組織との会合（モリタニア）

ホームページ「根をデザインする」

国際耕種株式会社と NPO 法人サハルの森は、中近東やサヘル地域における実用的かつ持続的な植林活動の経験をもとに「根をデザインする」と名付けたホームページを開設いたしました。「根をデザインする」という考え方は、AAI ニュース第 12 号で既に紹介しましたが、その後に得られた知見も加えてホームページにまとめました。

平成 13 年 11 月 11 日から 11 月 15 日までの 5 日間、名古屋国際会議場において第 6 回国際根学会シンポジウム「根：植物と母なる大地地球をつなぐインターフェース」が開催されました。ここではホームページの宣伝も兼ねて、ポスターセッションと企業展示に出展し、世界の根研究者達との情報交換を行いました。

内容の概要は以下に示すとおりですので、興味のある方は是非のぞいてみて下さい。

根をデザインする

～ 乾燥地における実用的かつ持続的な植林の方法 ～

URL : <http://www.open-resource.org/rootdesign/>

国際耕種株式会社
NPO法人サハルの森

第一部：乾燥地に生きる

- 砂漠の気候、砂漠の生活
- 移動をベースとした持続可能な資源利用
- 家畜との共生
- 人々の生活と樹木

第二部：根のデザイン

～考え方の基本にあるもの

- 自然条件の利用とちょっとした工夫
- 根の張り方が樹木生存のカギを握る
- 根域の環境はどこまで操作できるか？
- 人々の生活の中で植える
- 根のデザインの前に開ける大きな可能性



ポスターセッション



企業展示

第三部：植林の進め方

～種子から苗、そして自然の中へ

- 従来のやり方にとらわれず
～長根苗を事例として～
- 何をどこに植えるか
- 仕事の進め方
- 苗を育てる、苗を定植する
- 植栽樹の保護、保育、利用